

# オアシス



## クリスマス・マーケットとおとぎの国 — グリム童話を考える ⑩ —

大野 寿子

春にはいささか不似合いのタイトルにも見えようが、筆を走らせている今はまだ冬。私的にホットな話題を綴ることとする。

\* \* \*

二〇一二年一月一七日から二〇日にかけて、ドイツ連邦共和国ヘッセン州カッセル市郊外に位置するカッセル大学で「グリム兄弟会議二〇一二」(Brüder-Grimm-Kongress 2012)が開催され、筆者も研究発表のため渡独した。総合テーマは「メルヒェン、神話そして現代性」<sup>モデルネ</sup>グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』二〇〇年—「Märchen, Mythen und Moderne: 200 Jahre Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm」。<sup>ド</sup>イツ語では頭文字Mが頭韻を踏んでいるのだが、この小気味良いリズムが和訳では伝わりにくいのが残念だ。ドイツのみならず世界各地から、グリム童話、児童文学、神話、文化学研究者など約二〇〇名が集い、四日間熱心な意見交換を繰り広げた。

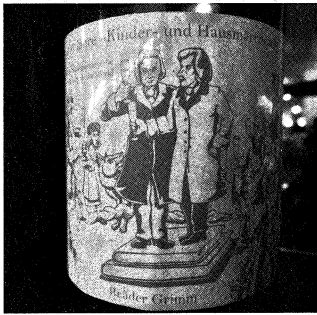


図1 グリム兄弟と童話の登場人物が描かれたワインのラベル (筆者撮影)

なにも真冬の寒い時期に開催しなくても……と思いましたが、グリム兄弟編集『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(通称『グリム童話』)第一巻第一版が刊行された一八二二年二月二〇日の記念日に照準を合わせ、カッセル大学とカッセル市とヘッセン州が大々的に企画したようである。二〇一二年二月二〇日、ちょうど二〇〇周年の日を会議最終日に定め、州立劇場でのファンパードイニング作オペラ『ヘンゼルとグレーテル』鑑賞

の夕べが、会議のクライマックスだった。幕間の休憩時間に会議参加者や議員さんたちと咲かせた会話の傍らには、グリム兄弟印のスパークリング・ワイン(図1)。「二〇一二年グリム年」

が、特にヘッセン州では大々的に祝われていたのだが、グリム兄弟が少年期を過ごし、図書館司書として職についた町カッセルにおいて、その活気はまたひとしおであった。

\* \* \*

この時期に町を華やかにするもう一つのイベントは「クリスマス・マーケット」(Weihnachtsmarkt)<sup>①</sup>である。「待降節」(Advent)<sup>②</sup>、すなわちクリスマス前約四週間のクリスマス準備期間だけ、ドイツ各都市で開催される冬の風物詩であり、マルクト広場にさまざまな露天商が立ち並び、移動式遊園地が目に見える。クリスマス・ツリーのオーナメント(図2)、ドイツ独特のクリスマス・リース(図3)、独特な香りのする香辛料とドライフルーツ入りの焼き菓子レープクーヘン(図4)、焼きソーセージ、焼き栗、焼きアーモンドなどが売られており、眺めるだけでもワクワクする。そしてこのマーケットに欠かせないの

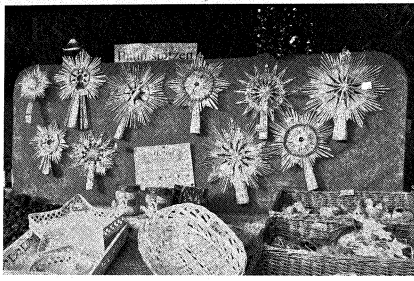


図2 伝統的なツリーのオーナメントは蕤細工(筆者撮影)

が、グリユーヴァイン(Glühwein)というホットワインである。「たぎるワイン」という名のこの飲み物は、クローブとシナモン、レモン汁に砂糖を加えた赤ワインを沸騰直前まで温めたものであり、フランスではどうも風邪をひいたときにしか飲まないらしいが、ドイツではクリスマス・マーケットの野



図3 ツインマーマン家のクリスマス・リース(筆者撮影)



図4 レープクーヘンはプレゼント用にハート型で吊り下げるタイプのものが人気(筆者撮影)

外の屋台で凍えながら立ち飲みするものである。最近日本の大都市でも、ドイツ風クリスマス・マーケットがよく開催されているが、日本の冬がドイツに比べてマイルドすぎるため、グリユーヴァインのむせかえるような香りは、温暖な気候では強烈すぎるように思われる。やはり氷点下の屋外で、美しいクリスマス・イルミネーションに包まれつつ味わってこそその飲み物だ。

\* \* \*

グリユーヴァインのもう一つの楽しみは、その容器である。日本だったら紙コップに注がれて出てきそうだが、ドイツでは必ず陶器のマグカップで提供される。しかもこのマグカップは、クリスマス・マーケットが開催される町ごとに、模様も形も毎年異なるのである。このカップは、実はデポジット制である。一杯五〜六ユーロ(二〇一二年一二月のレートで約五五〇〜六六〇円)で買ったグリユーヴァインを飲み終わり、店にカップ

を返すと二ユーロ（約二二〇円）が戻ってくるというシステムだ。エコなドイツならではのシステムだとも、それだけワインが熱いのだともいえる。都市ごとに毎年異なるカップのデザインは、安くてかわいいものが大好き女子の収集魂をくすぐってくれる。二〇一二年のカッセルのクリスマス・マーケットのグリーンヴァイン用マグカップは、二〇一二年一二月のカッセルでしか手に入らないのだ。カップを店に返さなければデポジットの二ユーロは戻ってこないが、記念のカップは手に入る。ベルリン、フランクフルト、ミュンヘン、ハンブルクなど、開催されるクリスマス・マーケットの数だけオリジナルのグリーンヴァインのカップが存在するのだから、それを集めるために各地のマーケットを巡るのもまた一興であろう。

\* \* \*

実は、カッセルのクリスマス・マーケットは「メルヘン・クリスマス・マーケット」(Märchenweihnachtsmarkt)と呼ばれる、グリム童話にちなんだ数々の仕掛けが施されている。まず、これまでかなり熱く語ってきたグリーンヴァインのオリジナルマグカップには、毎年違うグリム童話の挿絵が施されている。二〇一二年は「星の銀貨」(Stentaler)だった(図5右)。また、アルコールが飲めない人には、屋台のホットチョコレートが勧めである。そのカップには、クリスマス・ツリーを象ったとされるクリスマス・ピラミッドとグリム童話の登場人物たち、そしてほかならぬグリム兄弟の肖像が描かれている(図5左)。



図6 特大クリスマス・カレンダー (筆者撮影)



図5 カッセル・クリスマス・マーケットの2012年オリジナルカップ  
左：ホットチョコレート用、右：グリーンヴァイン用 (筆者撮影)

超特大絵本が設置されており、子ども連れの家族が立ち止まっては楽しんでいた(図8)。それ以外にも、ブタの丸焼きを作るサンタクロース(図9)、超特大クリスマス・ピラミッド(図10)など、シャッターを押さずにはいられないものばかり。グリム研究者の筆者がこう

また、待降節に毎日一枚ずつめくって楽しむクリスマス・カレンダー<sup>⑤</sup>の特大版がマーケットに設置されており、グリム童話の数々のお話のジオラマが、一つずつ納められていた(図6図7)。また各所に

いうのも憚られるが、グリムのおとぎの国に迷い込んでみたかったら、一二月の粉雪舞う夜、カッセルのメルヒェン・クリスマス・マーケットを温かいグリユー・ヴァイン片手に散歩する  
とよい。ただし、お酒は二〇歳からなのであしからず。

— おおの ひさこ・文学部准教授 —

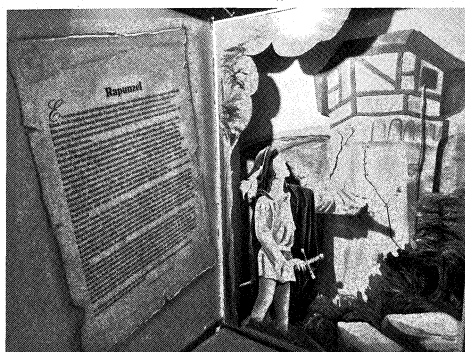


図8 子どもの背丈ほどの特大絵本（ラプンツェル）  
（筆者撮影）



図7 クリスマス・カレンダーの窓の一つ  
（いばら姫）（筆者撮影）



図10 特大クリスマス・ピラミッド  
（各階層に童話のジオラマ）  
（筆者撮影）

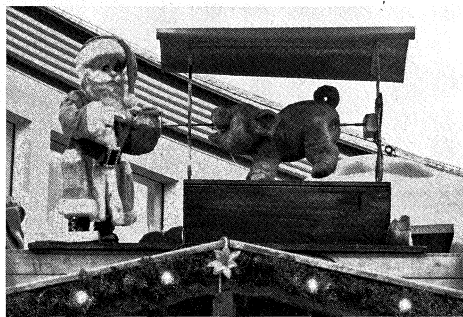


図9 豚を焼くサンタ（焼きソーセージ屋の屋台の屋根）  
（筆者撮影）

# 【注】

(1) 正確には、二月二四日のクリスマススイブから遡ること約四週間の期間で、日曜日が必ず四回入っていないなければならない。

(2) ドイツ語で Adventskranz（アドヴェンツ・クランツ）。よくある壁掛け型ではなく、樅の枝に木の実や花などで装飾したドーナツ型のテーブル飾りで、蝋燭が必ず四つ立っている。待降節の四つの日曜日と関係しており、一番目の日曜日がくると蝋燭一本だけに火を灯し、二番目の日曜日には二本目の蝋燭に、三番目には三本目に火を灯しながら、クリスマスを待ちわびる。四本目の蝋燭に火が灯ると、クリスマスはすぐそこにやってくるのである。

(3) ドイツ語で Lebkuchen（レープクーヘン）。秋冬に出まわる焼き菓子で、「ヘンゼルとグレーテル」のお菓子の家（本当はパンの家）はこのレープクーヘンでできていると思われているドイツ人が多い。しかし、「グリム童話」のドイツ語原文には、どの版にも「レープクーヘン」という記載はない。ただし、フンパーディングクのオペラ「ヘンゼルとグレーテル」にはこのお菓子の名前が登場するので、おそらくそれが誤解の原因だともいわれている。

(4) ドイツ語で Weihnachtspyramide（ヴァイナハツ・ピラミード）。一八、一九世紀頃からクリスマス・ツリーのかわりに教会に飾られたという、ドイツのエルツ山地に源を発する伝統的な木工細工である。聖書にちなんだ幼子キリストの誕生や聖歌隊の合唱の場面などが再現してある木製のミニチュア細工（ジオラマ）が、ウエディングケーキのように二段三段と重ねられ、その一番上には木製の大きなプロペラが付いている。ピラミッドの周りには蝋燭立てが複数設えてあり、蝋燭の炎の揺らめきを楽しむこともできるのだが、メインテーマは蝋燭の炎が作り出す上昇気流にある。その気流が発生すると自動的に頂上のプロペラが回転し、その回転軸に連動している各段のミニチュア細工が、歌舞伎の回り舞台のように回転するのである。最近の野外のクリスマス・ピラミッドは電動式のものが多いが、やはりアナログな方が、炎の揺らめきや蝋燭の温かさも感じられてなかなかよい。

(5) ドイツ語では Adventskalender（アドヴェンツ・カレンダー）といい、「待降節暦」という意味のいわば日めくりカレンダーのようなものである。待降節が始まる二月はじめ（場合によっては一月末）からクリスマス・イブ（二月二四日）までの日付の小窓が施されており、その日がくると同日の小窓を開ける。二月一七日がくると二七日の小窓を開くという具合である。お菓子メーカーのカレンダーだと、その小窓の中にチョコリートなどが入れられており、毎日ちよつとずつの贈り物で楽しみながらクリスマスの到来を待つのである。カード型カレンダーだと、小窓の中には天使などの美しい絵が描かれている。